

【河野学園創立 90 周年 特別寄稿】

河野学園 創立 90 周年を振り返って

——創立者 河野タカ先生の精神と創立 50 周年記念当時について——

河 野 光 子

【Special Project Commemorating the 90th. Anniversary of Kohno Gakuen】

Kohno Gakuen—Looking Back at its 90 Years—

The Spirit of Taka Kohno, in the Days of its 50th Anniversary

by

Mithuko Kohno

1 はじめに 一本稿の趣旨について

学校法人河野学園は、大正 15 年（1926）4 月の「河野高等技芸院」創設から数えて 90 年が過ぎ、下関短期大学〔昭和 37 年（1962）開学～平成 13 年（2001）3 月まで下関女子短期大学〕の建学から 55 年が過ぎた。本稿の目的は 2 点ある。1 点目は、創立者・建学者である河野タカ〔明治 24 年（1891）生～昭和 55 年（1980）没〕が昭和 51 年（1986）、創立 50 周年の折に残した言葉や当時の記録をひもとくことにより、創立・建学の精神を振り返ることである。河野タカは昭和 55 年（1980）に他界したので、創立 50 周年が学園創立節目の年として迎えた最後に

あたるためである。2 点目は、創立の精神に基づき、今後の教育活動を考える事である。

2 河野学園創立 50 周年記念行事・事業と創立者の精神

河野学園創立 90 周年にあたる平成 28 年（2016）10 月 16 日（土）午前 10 時より体育館にて下関短期大学付属高校生・下関短期大学学生・河野学園教職員が一堂に会して記念式典が行われ、記念品（学園の歩みが記されたパンフレットとクリアファイル）が式典出席者や関係者に配布されたことは記憶に新しい（写真 1）。

この式典からさかのぼること 40 年前、創立者河野



写真 1 学園創立 90 周年記念
パンフレット

タカが先頭に立って行った最後の記念行事である創立 50 周年記念行事の様子は、『河野学園新聞』54 号（昭和 51 年 11 月 26 日発行）に詳しい⁽¹⁾。「河野学園創立五十周年記念式典」は、昭和 51 年（1976）11 月 26 日、「体育館並びに併設教育資料館および第一幼稚園増設落成」を兼ねて盛大に挙行された（図 1）。ここでいう「併設教育資料館」とは、明美寮増改築・体育館内の資料室が該当しており、記念事業には『河野タカ伝』の出版も含まれていた⁽²⁾。『河野学園新聞』第 54 号は、記念行事について、記念式典の挙行だけではなく、次の行事があったことを記している（当時の役職・名称をそのまま列記）。



図 1 『河野学園新聞』54 号 1 面
（1976 年 11 月 26 日発行）

「① 9 月 23 日(木) 午前 9 時より 記念体育祭
（本学グラウンド）

② 10 月 26 日(火) 午後 6 時より 短大高校音楽科 第八回定期演奏会（下関市文化会館）

③ 11 月 20 日(土) 午前 10 時より 記念講演

昇地三郎（中村学園大学教授・しいのみ学園長）「ゆさぶりの教育」（講堂）

④ 11 月 25 日(木) 午後 2 時より 学園関係物故者慰霊祭（本館 4 階ホール）

⑤ 11 月 26 日(金) 午前 10 時より 五十周年記念式典（体育館）

⑥ 11 月 26 日(金) 正午より 祝賀会（講堂）

⑦ 11 月 27 日(土) 午後 1 時より 記念学園祭（大学祭・文化祭）第 1 日目（本館・講堂）

・ 11 月 28 日(日) 10 時より午後 4 時まで 記念学園祭（大学祭・文化祭）第 2 日目 一般公開

・ 11 月 29 日(月) 午前 9 時より 記念学園祭（大学祭・文化祭）第 3 日目（本館・講堂）」

このように、⑤記念式典・⑥祝賀会、④慰霊祭、③外部有識者を招いた記念講演、といった直接的に 50 周年を味わう記念行事が行われただけでなく、同年度の①体育祭、②定期演奏会、⑦学園祭といった恒例行事も「五十周年記念行事」として開催されたことが記録されている。因みに、当時の学園在学者数は合計 1178 人（女子短期大学 493 人〔家政科：家政専攻・食物栄養専攻、保育科、音楽科〕、付属高校 425 人、付属第一幼稚園 118 人、付属第二幼稚園 142 人）で、教職員を含めると 1200 人以上が記念式典に集ったことが窺える⁽³⁾。

次に、創立 50 周年に臨んだ創立者の精神が分かる資料を紹介したい。それは、河野タカ学園長の顔写真入りで『河野学園新聞』54 号（1 面）に掲載された記念式典における「祝辞」

である(図1)。以下に全文を引用する(改行は原文通り)。

「学園創立五十周年を迎え、このたびその記念式と、体育館、資料館、幼稚園舎の落成式をあわせ行うことができるにいたりましたことは、多年にわたり多くの方々の絶大なご協力、ご援助のたまものと衷心より感謝申し上げる次第でございます。

かえりみますと、大正十五年四月に河野高等技芸院として女学校の卒業生十三人、高等小学校卒業生十二人のみなさんとともにささやかな学校を始めましてからいつのまにか五十年の歳月が経過いたしました。女性の幸福は家庭とともにあり、女性は社会の基盤であると信じ、いつの時代にもかわらない女性の生き方を求め、温雅にして有為な女性の育成を念願として今日まで努めてまいりました。

長い間には色々のことがございましたが、そのたびごとに、文部省をはじめ県、市ご当局、ご父兄、同窓生等多くの方々のおかげで今日の日を迎えることができました。本当にありがたい極みに存じます。ここに謹んで心から深く感謝申し上げます。

本日の記念式にあたり往時をふりかえり、あらたな決意のもとに明日よりをまたこの道に努めさせて頂く所存でございます。今後とも旧に倍してご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。」

この文より河野タカは、学園長として創立以来「いつの時代にもかわらない女性の生き方」「温雅にして有為な女性の育成」を目標として生涯、教育活動を展開してきたことが分かる。

3 創立者の精神と当時の認識

50周年記念行事を特集した『河野学園新聞』54号(5面)には、NHKテレビ放送「新女大学—ある老教師の夢」に河野タカが登場した事についても掲載している(図2)。これは、NHKで九州・山口の各県より教師を一人ずつ選び「教師の群像」シリーズ(各15分間)として放映(昭和51年10月29日7時20分～、午後1時25分～)された番組である。『河野学園新聞』54号には、発行人である「学校法人河野学園下関女子短期大学付属高等学校新聞部」による番組視聴後の感想が記されているので、以下に一部を引用する(誤表記あり、原文ママ表記)。

「既に八十六才の高^(ママ)令にありながら、その



図2 『河野学園新聞』54号5面記事
(1976年11月26日発行)

お年を少しも感じせしめず、その半世紀に垂^{ママ}んとする輝しい学園の伝統、老いの将に至らんとするも知らず、夜間の校内巡視、教育にかけられるその情熱、ただただ頭の下がる思いです。(中略)寮生のための講堂朝礼、朝食、宵間かけての学生生徒指導、その一挙手一投足に学園のきびしい歩みが感じられますね。異色！何が異色？なんでも異色といえましょう。ユニークな「それが又この学園の五十年を支えたカリスマと拝見しました」と、これは一視聴者の声でした。」

注目されるのは、当時の学園内新聞部が河野タカの往年の歩みに対し「頭の下がる思い」「学園のきびしい歩み」と評すると同時に「異色」「カリスマ」と特異性を記すことであろう。

これは学園内部の声であるが、この記述に呼応するような本学の紹介記事が当時の『山口新聞』にもみられる。それは、「学校創立者が開校以来五十年の長期にわたり、一貫して第一線の教育実践を行っているケースはまれで、河野園長（学長）の女子教育に傾ける情熱に多くの賛辞が寄せられている」という記述である⁽³⁾。つまり、河野タカが 50 年間、一貫して「温雅にして有為な女性の育成」を実践し続けたこと自体が「まれ」であり、本学園の特色と内外で認知されていた状況が偲ばれる。

4 むすびにかえて ―創立者の精神と温故知新―

本稿では、河野学園 50 年当時を振り返ることを通じて、創立者・建学者の精神について紹介を行った。2 点目の本稿の目的である「創立の精神に基づき、今後の教育活動を考える事」は、筆者の目からみた創立者の姿を通じて考えたい。それは、河野タカが質素儉約を旨として女性教育に生涯をささげ続けた姿である。

河野タカは、「温雅にして有為な女性の育成」を本学園の教育理念としただけでなく、自分自身も「温雅にして有為な女性教師」であり続けようと日々努力した。換言すれば、河野タカは学生・生徒に「良志久（らしく）」（良い志を久しく）という言葉を折々に訓示したが、自分自身も与えられた役割・本分を全うできるよう率先して実践した人物であった。例えば、学園が人手不足の折には、用務（掃除を含めた環境整備他）・校舎の見回り・寮の宿直など、率先して円滑な



写真 2 「日本服装変遷史人形」展示風景（1958 年）

運営に努めたのである。

今でも思い出されるのは、昭和30年代前半・河野タカ60歳代後半の出来事である。昭和30年（1955）、当時の福田泰三下関市長から中華人民共和国の周恩来首相・北京市長に贈る日本人形の制作を依頼されただけでなく、昭和33年（1958）には下関水産大博覧会（下関市主催「関門トンネル開通 市制70周年記念下関大博覧会」3月20日～5月30日）の折、福田下関市長より「日本服装史」を展望できる人形の出品を依頼され、それらの制作・出品に尽力した（写真2）。現在、河野記念館（3階ガラスケース内）に展示している「日本服装変遷史人形」が博覧会出品作品である。顔の部分は陶製で一つひとつ表情が異なる。当時、京都で技術を修得して下関市内で人形専門店を営んでいた「みやこ人形店」に制作を発注しただけではなく、服飾デザイン・生地を選定、制作の細やかな部分まで服飾担当の教職員と共に考え、手掛けた作品群である。

このように自分が習得した技芸を生かした教育・社会貢献・地域振興に尽くしただけでなく、実務的な仕事も率先して行った。実務の一例を挙げると、同時期に現在の桜山校舎の整備のため夏季休業・春季休業中に生徒・教職員と共に運動場の土手埋めや草取りを行い一緒に汗を流した事も思い出される。生涯、河野タカは、創業者・学園の代表者として理念を教育・提示する教師としての役割だけでなく、学園の実務者・経営者としての役割を果たすべく第一線で働き続けた。

周知の通り、第2次安倍内閣における最重要課題の一つとして教育提言を行うことがあり、内閣の私的諮問機関「教育再生実行会議」が平成25年（2013）から開催されている。教育再生実行会議による「第十次提言」をみると冒頭「はじめに」において「子供たちが夢と志に向かって頑張れる国を創るには、学校、家庭、地域がそれぞれの役割と責任を自覚し、社会全体で子供を育むことが必要不可欠です」と記されている⁽⁴⁾。これは、河野タカの言葉を借りると〈時代が変わっても、それぞれが「良志久（らしく）」生きる事を目指す教育を行う必要がある〉という事であろう。このように創業者河野タカの精神を振り返り、再考することは温故知新であり、現代社会に対応した新たな教育を展開するためにも必要不可欠であると考えられる。

参考文献・注

- 1) 学校法人河野学園下関女子短期大学付属高等学校新聞部『河野学園新聞』54号、昭和51年11月26日
- 2) 豊田行二『河野タカ伝』泉菊印刷、昭和51年11月
- 3) 「半世紀迎えた“女の園” 学校法人河野学園」『山口新聞』昭和51年11月26日朝刊、2面
- 4) 教育再生実行会議「自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上（第十次提言）平成29年6月1日、
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaizei/pdf/dai10_1.pdf